



# 元総社蒼海遺跡群 (30)

前橋都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

2 0 1 0 . 3

前橋市埋蔵文化財発掘調査團









# 元総社蒼海遺跡群(30)

前橋都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書



H-6号住居跡出土の  
錫又瓶 (S-1/3)

2 0 1 0 . 3

前橋市埋蔵文化財発掘調査団





元絶社舊海道路群(30)調査区全景(南西から)



A-1号道路状造構全景（南から）



W-1号溝全景（東から）



## はじめに

前橋市は、関東平野の北西部に位置し、名山赤城山を背に利根川や広瀬川が市街地を貫流する、四季折々の風情に溢れる県都です。市域は豊かな自然環境に恵まれ、2万年前から人々が生活を始めました。そのため市内のいたる所から、人々の息吹を感じられる遺跡や史跡、多くの歴史遺産が存在します。

古代において前橋台地には、広大に分布する穀倉地帯を控え、前橋天神山古墳などの初期古墳をはじめ、王山古墳・天川二子山古墳といった首長墓が連続と築かれ、上毛野国の中心地として栄えました。また、続く律令時代になってからは總社・元總社地区に山王廃寺、国分僧寺、国分尼寺、国府など上野国の中核をなす施設が次々に造されました。

中世になると、戦国武将の長尾氏・上杉氏・武田氏・北条氏が領をけずった地として知られ、近世においては、譜代大名の酒井氏・松平氏が居城した関東三名城の一つに数えられる履橋城が築かれました。

やがて近代になると、生糸の一大生産地であり、横浜港から前橋シルクの名前で遠く海外に輸出され日本の発展の一翼を担いました。

今回、報告書を上梓する元總社蒼海遺跡群（30）は古代上野国の中核地域の調査であります。上野国府推定地域に隣接することから、調査成果に多くの注目を集めています。今回の調査では、国府そのものに関連する遺構の検出はかないませんでしたが、古墳・平安時代の堅穴住居跡・中世の堀跡等を検出しました。

今は一本の糸に過ぎない調査成果も織り上げて行けば、国府や国府のまちの姿を再現できるものと考えております。

残念ながら、現状のままでの保存が無理なため、記録保存という形になりましたが、今後、地域の歴史・前橋の歴史を解明する上で、貴重な資料を得ることができました。

最後になりましたが、この調査事業を円滑に進められたのは、関係機関や各方面のご配慮の結果といえます。また、寒風の中、直接調査に携わってくださった担当者・作業員のみなさんに厚くお礼申しあげます。

本報告書が斯学の発展に少しでも寄与できれば幸いに存じます。

平成 22 年 3 月

前橋市埋蔵文化財発掘調査団  
団長 戸塚 良明



## 例　　言

- 1 本報告書は前橋市都市計画事業元総社土地区画整理事業に伴う元総社蒼海道路群（30）発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査の要項は次のとおりである  

遺跡名	元総社蒼海道路群（30）
調査主体者	前橋市埋蔵文化財発掘調査団 団長 戸塚良明
調査場所	群馬県前橋市総社町総社 3095 - 8 ほか
道路コード	21 A 130 - 30
発掘調査期間	平成21年11月12日～平成21年12月8日
整理・報告書作成期間	平成21年12月9日～平成22年3月11日
発掘・整理担当者	佐野良平（技研測量設計株式会社）
- 3 本書の編集は佐野が行った。原稿執筆はIを神宮 啓（前橋市教育委員会）、他を佐野が担当した。
- 4 本書はデジタル編集・組版により作成し、その作業は前田和昭（技研測量設計株式会社）が担当した。
- 4 報告書作成にあたり、人骨の鑑定については宮崎重雄氏のご助言を賜った。記して謝意を表します。
- 5 発掘調査及び整理作業参加者は次のとおりである。  
大川明子 中村岳彦 山田誠司 桐巣正志 （以上、技研測量設計株式会社調査員）  
飯塚常子 石川輝子 今井美智子 内島勝義 遠藤幾子 大川悦子 囲野 茂 女屋みどり 木村広美 木暮孝一  
小嶋八重子 佐藤和彦 佐藤文江 佐藤百合子 四宮昭俊 下田順子 須藤香織 高橋一巳 高山 愛 清澤佳子  
武井綾子 竹澤賢司 田部井美紗子 烏山浪江 長田友香 西潟 登 平野ミツ子 福島暉子 星野光雄  
堀越晴子 本多和子 間庭啓治 三原一重 矢内司郎 矢内ヒロ子 山下雅恵 湯浅澄子 横沢百合子 吉田文江  
（以上、作業員・整理補助員）
- 6 本調査における図面・写真・遺物は、前橋市教育委員会文化財保護課で保管している。
- 7 下記の諸氏・諸機関にご指導・ご協力を賜りました。記して謝意を表します（順不同、敬称略）。  
有山匡世 瀬田吉夫 日沖剛史 水谷貴之 山下工業株式会社

## 凡　　例

- 1 指図中に使用した北は座標北である。
- 2 指図に国土地理院発行1/200,000『宇都宮』『長野』、1/25,000『前橋』、前橋市発行1/2,500都市計画図を使用した。
- 3 土層の色調は『新版標準土色図』（農林水産技術会議事務局監修、財團法人日本色彩研究所色票監修）に基づいている。
- 4 遺構名稱は、住居跡：H、溝：W、土坑：D、土壤墓：DB、井戸跡：I、ピット：Pである。  
例外として火葬跡は略称を使用していない。
- 5 遺構・遺物実測図の縮尺は原則的に次のとおりである。その他各図スケールを参照されたい。  
遺構 住居跡・土坑・ピット…1/60 潟…1/30 道路状遺構…1/120 溝…1/100、1/150  
土壤墓・火葬跡…1/20 全体図…1/200  
遺物 土器・石製品…1/3、1/4 鉄製品…1/2 古銭…1/1
- 6 表中の計測値については（ ）は現存値を表す。
- 7 遺構図、遺物実測図のトーン表現は以下の通りである。  
遺構図…硬化面 ■ 砂礫敷設範囲 ■  
遺物測図…須恵器（還元焰焼成） ■ 灰陶陶器 ■ 軸薬 ■
- 8 主な火山降下物等の略称と年代は次の通りである。  
As-B（浅間B軽石：1108）、Hr-FP（榛名ニッカ岳伊香保テフラ：6世紀中葉）、  
Hr-FA（榛名ニッカ岳汎用テフラ：6世紀初頭）、As-C（浅間C軽石：推定3世紀後葉）



## 目 次

口絵1  
口絵2  
序  
例言・凡例

I 調査に至る経緯	1
II 遺跡の立地と環境	1
III 調査の方針と経過	5
IV 基本層序	5
V 遺構と遺物	7
VI まとめ	23

## 挿図目次

Fig. 1 遺跡の位置	
Fig. 2 周辺道路図	2
Fig. 3 基本層序	5
Fig. 4 元経社着海遺跡群位置図とグリッド設定図	6
Fig. 5 調査区全体図	10
Fig. 6 H-1号住居跡	10
Fig. 7 H-2・3号住居跡	11
Fig. 8 H-3号住居跡竈、H-4号住居跡、P-7～9号ピット	12
Fig. 9 H-5・6号住居跡	13
Fig. 10 A-1号道路状遺構	14
Fig. 11 W-1号溝	15
Fig. 12 W-2～6号溝	16
Fig. 13 D-B-1・2号土壤窓、1号火葬跡、D-1～3号土坑	17
Fig. 14 D-4～12号土坑、P-1～6・10号ピット	18
Fig. 15 H-1～3・5号住居跡出土遺物	19
Fig. 16 H-5・6号住居跡、W-1号溝、1号火葬跡、 D-12号土坑、遺構外出土遺物	20
Fig. 17 遺構外出土遺物	21

## 表目次

Tab. 1 周辺道路概要一覧表	3
Tab. 2 調査経過	5
Tab. 3 出土遺物観察表	21
Tab. 4 井戸・土坑・ピット計測表	21

## 写真図版目次

Pl. 1 調査区全景	
Pl. 2 H-1号住居跡全景、H-1号住居跡遺物出土状況、H-2号住居跡全景、H-3号住居跡全景、 H-3号住居跡竈全景、H-3号住居跡遺物出土状況、H-4号住居跡全景	
Pl. 3 H-4号住居跡竈全景、H-5号住居跡全景、H-5号住居跡竈全景、H-5号住居跡遺物出土状況、 H-6号住居跡全景、H-6号住居跡竈全景、A-1号道路状遺構砂礫敷設状況	
Pl. 4 W-1号溝全景、W-2・5号溝全景、W-3・4号溝全景、DB-1号土壤窓全景、DB-2号土壤窓全景、 1号火葬跡確認状況、1号火葬跡全景	
Pl. 5 出土遺物	
Pl. 6 出土遺物	

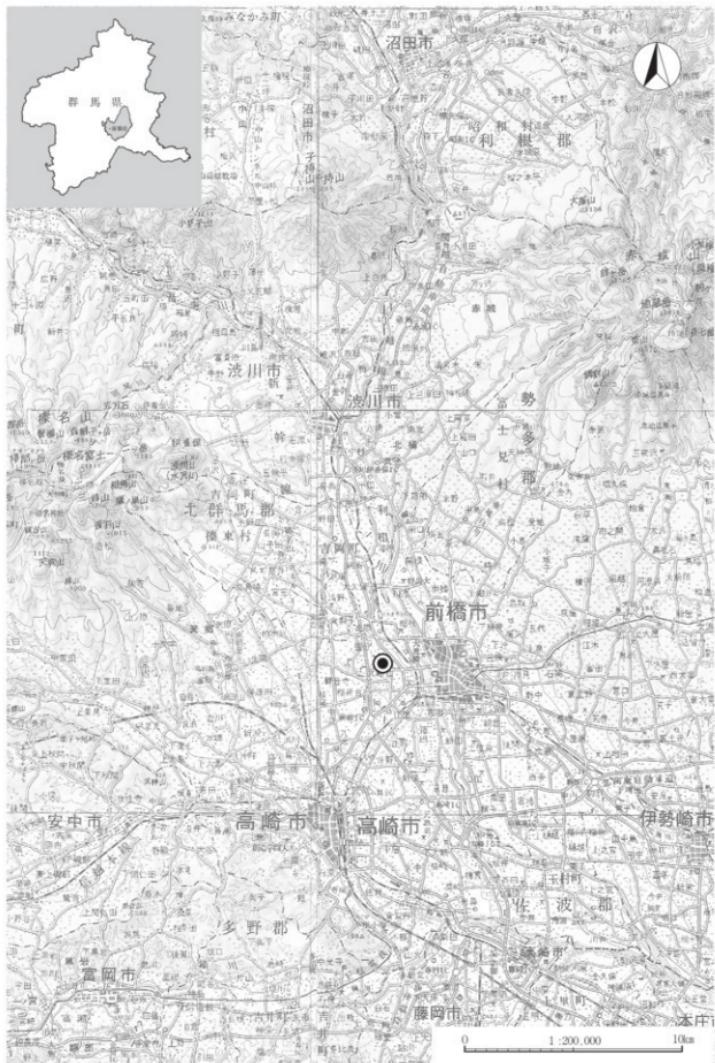


Fig. 1 清跡の位置



## I 調査に至る経緯

本発掘調査は、前橋都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業に伴い実施され、10年目にあたる。本調査地は、周辺で埋蔵文化財調査が長年にわたって行われていることから、遺跡地であることが確認されている。

平成21年9月4日付けで前橋市長 高木政夫（区画整理第二課）より前橋都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の依頼が前橋市教育委員会に提出された。前橋市教育委員会ではこれを受け、内部組織である前橋市埋蔵文化財発掘調査団 団長 戸塚良明（以下「調査団」という。）に発掘調査実施について協議を行った。しかし、調査団では既に直営による発掘調査を実施しており、調査団直営による調査の実施が困難であるため、民間調査組織に業務を委託したいとの回答をした。民間調査組織の導入については、依頼者である前橋市の合意も得られ、平成21年10月16日付けで前橋市と調査団との間で発掘調査業務契約を締結し、その後、10月21日付けで調査団と民間調査組織である技研測量設計株式会社 代表取締役社長 鳥田大和との間で発掘調査業務契約を締結し、発掘調査開始を開始した。

なお、遺跡名称「元総社蒼海遺跡群（30）」（遺跡コード:21A130-30）の「元総社蒼海」は区画整理事業名を採用し、数字の「（30）」は過年度に実施した調査と区別するために付したものである。

## II 遺跡の位置と環境

### 遺跡の位置

本調査地は、前橋市街地から利根川を隔て、西へ約3kmの地点、前橋市元総社地内に所在し、西約0.7kmには関越自動車道が南北に、南には国道17号・主要地方道前橋・群馬・高崎線が東西に、また東約0.5kmには市道大友・石倉線が南北にそれぞれ走っている。本調査地の立地する地形は、前橋台地上、榛名山麓を源にする牛池川、染谷川が開析・形成した細長い微高地との比高3~5mを測る。遺跡が立地する台地上は主として桑畑などの畠地として利用されているが、本遺跡地の所在する位置は南東に向く緩やかな谷地形を呈しており、水田として利用されていた。

### 歴史的環境

本遺跡が立地する元総社地域には上野国府推定地や上野国分寺を中心に連綿と遺跡が広がる地域である。周辺では関越自動車道建設や区画整理事業等に伴う発掘調査が行われており、多くの遺物・遺構が確認されている。本遺跡周辺地域における時代ごとの遺跡の概要は以下の通りである。

縄文時代の遺跡は八幡川右岸の微高地上に産業道路【15】・産業道路西【16】・総社閔泉明神北Ⅲ遺跡【61】、本遺跡の立地する牛池川右岸台地上に上野国分僧寺・尼寺中間地域【22】・元総社小見Ⅲ遺跡【59】・元総社蒼海遺跡群（24）【64】などが挙げられ、堅穴住居跡が確認されている。

弥生時代に遺跡としては日高遺跡【18】・【19】、上野国分僧寺・尼寺中間地域【22】、正觀寺遺跡【21】等があるがその分布は散漫である。

古墳時代になると本遺跡周辺の区域は県内でも中心的な地域であったことが窺われる。それを示すものとして総社古墳群が上げられ、古墳時代後期・終末期に至り、王山古墳【7】、二子山古墳【12】、愛宕山古墳【10】、宝塔山古墳【13】、蛇穴山古墳【8】等の首長墓が多数築造された。

奈良・平安時代に至ると、本遺跡周辺は上野国府・国分寺【2】・国分尼寺【3】・山王庵寺【4】の建設に示されるように古代の政治・経済・文化の中心地として再編成される。

上野国府は本遺跡の南東の区域におよそ900m四方に推定され、関連遺跡として元総社小学校校庭遺跡【14】、元総社寺田遺跡【43】、元総社宅地遺跡【55】などがある。また元総社明神遺跡【24】では南北方向の溝跡、闇

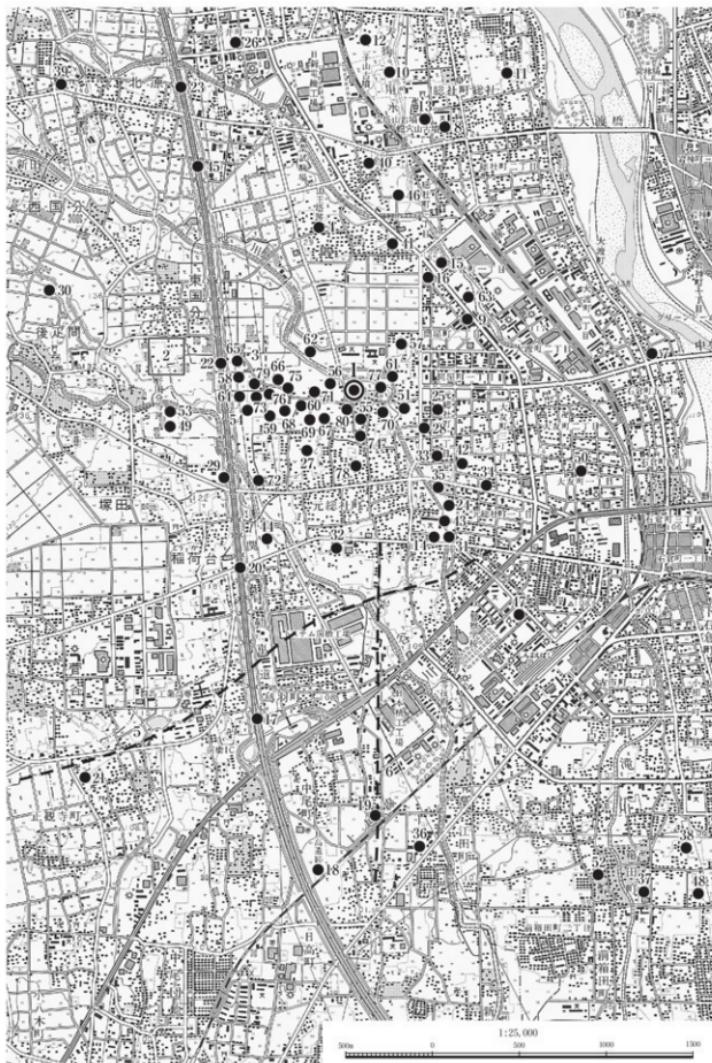


Fig. 2 周辺遺跡図



泉橋遺跡 [25] では東西方向の大溝が確認され、国府域の東外郭線が想定された。

国分寺は昭和 55 年以降の調査により、主要伽藍の礎石、塁垣、堀等が確認されている。国分尼寺は昭和 44・45 年のトレンチ調査により伽藍配置が推定され、その後平成 12 年の前橋市埋蔵文化財発掘調査團の確認調査により、東南隅と西南隅の築垣、それと平行する溝跡や道路状遺構が確認された。関連遺跡として中尾遺跡 [17]、鳥羽遺跡 [20]、上野国分僧寺・尼寺中間地域 [22] などが挙げられる。

山王庵寺は昭和 3 年に日枝神社境内が「山王塔址」として国指定史跡となり、その後昭和 49~56 年にかけて 7 次にわたる本格的な発掘調査が行われた。この調査で金堂の検出および「放光寺」範囲の平瓦出土により山王庵寺が「山ノ上碑」「上野交替実録帳」にみられる「放光寺」であることが有力視されるようになった。また平成 9~11 年の調査でも土坑から大量の塑像が出土し、平成 18・19 年の調査では北・東・西面の回廊を検出している。

また本遺跡の南約 1.5km には N~64°~E 方向に東山道（国府ルート）が、日高遺跡 [19] では幅約 4.5m の推定日高道が国府方向へ延びると推定されている。これらは当時の交通網を物語る重要な遺構である。

室町時代になると上野国守護の上杉氏から上野国守護源氏に任命された長尾氏が永享元年（1429）に蒼海城を築き、これを本拠地とした。蒼海城は県内でも最古級の城郭に位置づけられ、縄張りは国府の攝割と関連深いと考えられている。本遺跡周辺には屋敷に堀を巡らした城館跡が数多く認められる。元総社蒼海遺跡群（14）・（21）・（23）[74・78・80] では蒼海城の堀跡が確認されており、元総社蒼海遺跡群（25）[70] では南宋～元時代の青磁瓶が出土している。

Tab. 1 元総社蒼海遺跡群周辺遺跡概要一覧表

番号	遺跡名	調査年度	時代・主な遺構・出土文物
1	上野国守護源氏（跡）	2010	未調査
2	上野守家方陣（跡敷石）	1980~88	奈良、全世系層・飛鳥層
3	上野守家方陣	1990	奈良、西飛鳥、東飛鳥墓地
4	山王寺本堂跡	1974	奈良、明心院・附金石・全世系層・諸生集会・回廊遺石
5	東山道（跡）	—	—
6	白鳥遺跡（跡）	—	—
7	山王寺塔	1972	古墳・前方後円墳（大・中）
8	新六ヶ古墳	1975	古墳・方墳（大・中）
9	新七ヶ古墳	1988	古墳・円墳（大・中・小）
10	新八ヶ古墳	1996	古墳・円墳（大・中）
11	西見附の古墳	8.調査	古墳・前方後円墳（大・中・小）
12	西見附の古墳	8.調査	古墳・前方後円墳（大・中・小）
13	西見附の古墳	8.調査	古墳・方墳（大・中）
14	上野守家方陣陪葬碑	1991	平安・飛鳥式墓道標・飛鳥門・回廊跡
15	通事御用事御用事	1990	飛鳥・奈良層
16	通事御用事御用事	—	飛鳥・奈良層
17	中尾遺跡（事業区）	1970	奈良・平安・奈良層
18	中尾遺跡（事業区）	1977	奈良・木結構・方形回廊島・目尻跡・木製蓋瓦・平安・奈良朝木の跡
19	中尾遺跡（古跡区）	1978	奈良・木回廊
20	中尾遺跡（事業区）	1978~83	古墳・奈良層・鹿島遺跡・奈良・平安・自羽跡・飛鳥式墓道標（石板）
21	中尾遺跡（1 号・2 号施設）	—	奈良・自羽跡・古墳・自羽跡・奈良・平安・自羽跡・中尾遺跡
22	上野国守護源氏・尼寺中間地域（事業区）	1980~83	飛文・自羽跡・配石垣跡・奈良・自羽跡・奈良・平安・自羽跡・中尾遺跡・古墳・自羽跡
23	足見附（跡敷石）	1982	飛文・土器・東飛鳥・方墳・大田原・奈良・平安・自羽跡・中尾式墓道標
24	足見附（跡敷石）・一里塚	1982~85	飛文・自羽跡・方墳・自羽跡・奈良・平安・自羽跡・中尾式墓道標
25	足見附（跡敷石）	1983	飛文・土器・東飛鳥
26	中尾施設・玉置跡	1985~1990	奈良・平安・自羽跡・中尾・飛跡
27	中尾施設	1984	奈良・自羽跡・平安・自羽跡・中尾・自羽跡
28	中尾施設遺跡	1985	奈良・自羽跡・奈良・平安・飛跡
29	中尾施設遺跡（飛光寺）	1985	平安・自羽跡
30	中尾施設遺跡（1 番・2 番丸井）	1985~87	古墳・自羽跡・奈良・平安・自羽跡・中尾・近鉄立花遺跡
31	中尾施設	1986	平安・飛跡
32	中尾施設・玉置跡	1986~88	奈良・平安・自羽跡
33	中尾施設・玉置跡	1986~95	古墳・自羽跡・平安・自羽跡・中尾・飛跡・山岳遺跡
34	中尾施設	1987	奈良・平安・自羽跡・飛跡
35	八幡地勢見・豆葉跡	1987	古墳・自羽跡・平安・自羽跡・飛跡・地下式土坑
36	御戸遺跡	1987	平安・木回廊
37	中尾遺跡	1987	平安・木回廊
38	中尾遺跡	1987	平安・木回廊
39	中尾遺跡	1988	飛文・自羽跡・平安・自羽跡・中尾・飛跡
40	中尾遺跡	1989	古墳・自羽跡・飛跡・奈良・平安・自羽跡・中尾・飛跡
41	中尾寺・中尾遺跡・玉置跡	1989	奈良・自羽跡
42	中尾寺	1989	平安・自羽跡
43	上野守家方陣（1 号・2 号施設）	1988~91	古墳・木回廊・飛跡・奈良・平安・自羽跡・中尾・飛跡



参考文献

- 崇明小海文化的吴语调查报告 2000 「元祐村小海道路」

崇明小海文化的吴语调查报告 2001 「元祐村小海道路」

崇明小海文化的吴语调查报告 2002 「元祐村小海内区道路」

崇明小海文化的吴语调查报告 2002 「元祐村小海昌盛路」元祐杜姓王<sup>2</sup>道路

崇明小海文化的吴语调查报告 2003 「元祐村小海和睦路」

崇明小海文化的吴语调查报告 2005 「元祐村小海内区道路」<sup>3</sup>、<sup>4</sup>元祐街南洋街北<sup>5</sup>道路

崇明小海文化的吴语调查报告 2006 「元祐村小海道路」(4)

崇明小海文化的吴语调查报告 2006 「元祐村小海道路」(5)

崇明小海文化的吴语调查报告 2006 「元祐村小海道路群」(13)

崇明小海文化的吴语调查报告 2008 「元祐村小海道路」(14)-(29)

崇明小海文化的吴语调查报告 2008 「元祐村小海道路」(15)

崇明小海文化的吴语调查报告 2008 「元祐村小海道路群」(16)

崇明小海文化的吴语调查报告 2008 「元祐村小海道路」(18)

崇明小海文化的吴语调查报告 2009 「元祐村小海道路」(22)

崇明小海文化的吴语调查报告 2009 「元祐村小海道路」(23)

崇明小海文化的吴语调查报告 2009 「元祐村小海道路」(24)

崇明小海文化的吴语调查报告 2009 「元祐村小海道路」(25)



### III 調査の方針と経過

#### 1 調査範囲と基本方針

委託調査箇所は、前橋都市計画事業元総社土地区画整理事業の道路予定地で、調査面積は 570 m<sup>2</sup>である。グリッド座標については国家座標（日本測地系）X = + 44000.0000 m・Y = - 72200.0000 を基点とする 4 m ピッチのものを使用し、経線を X、緯線を Y として、北西隅を基点に番付して呼称とした。

本道路の X 190・Y 110 の公共座標は以下のとおりである。

日本測地系 X = + 43560.0000 Y = - 71440.0000

世界測地系 X = + 43914.9035 Y = - 71731.7599

発掘調査は 11 月 12 日に 0.25 バックホーを用いて表土掘削を開始した。遺構の確認・掘削は発掘作業員により移植コテ・鍛錬などで慎重に行われた。遺構調査に関しては土層の堆積状況を確認するために土層ベルトを住居跡は主軸方向、土坑・ピット等は長軸方向を基本として設定した。住居跡の遺物に関しては床面直上や住居跡に伴うものは No 遺物とし、覆土中の破片は一括遺物として取り上げた。

遺構図化については空中写真測量と電子平板を用いて平面図・断面図の測量・編集を行った。断面図についてはオルソーカメラに変換して編集を行った。遺構の記録写真については 35mm カラーフィルム・リバーサルフィルム・デジタルカメラの 3 種類を用いて担当者が撮影、遺跡全体に対してはラジコンヘリコプターによる空中撮影を実施した。

#### 2 調査経過

本遺跡の発掘調査は、平成 21 年 10 月 21 日付けで業務委託契約を委託し、現地調査は平成 21 年 11 月 12 日から 12 月 8 日まで行った。調査経過は以下のとおりである。

Tab. 2 調査経過

	11月																				12月							
	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	1	2	3	4	5	6	7	8	
表土掘削																												
遺構確認																												
遺構調査																												
測量																												
全景撮影																												
埋め戻し																												

### IV 基本層序



Fig. 3 基本層序



Fig. 4 元總社濱海道路群位置図とグリッド設定図



## V 遺構と遺物

H-1 (Fig. 6・15, PL. 2・5)

**位置** X 192～194, Y 113 グリッド **主軸方向** N-67°-W **規模** 長軸 6.23 m、短軸(3.93) m、壁現高 0.57 m。  
**面積** 12.08 m<sup>2</sup> **床面** 平坦で硬化面は所々確認できるが広がりをみせない。 **竈** 検出されなかった。 **住居内施設** 柱穴 2 基、壁周溝。 **出土遺物** 少量である。住居跡に帰属する遺物としては床面直上出土の S 字口縁台付甕（1）のみである。 **時期** 出土遺物が少量であるが床面直上で確認された S 字口縁台付甕から 4 世紀代と考えられる。 **備考** 本道跡北側に隣接する元総社小見内Ⅲ遺跡の 6 区 H-1 で本住居跡の北西壁・床面・柱穴が確認されている。

H-2 (Fig. 7・15, PL. 2・5)

**位置** X 193～195, Y 108～110 グリッド **主軸方向** N-77°-E **規模** 長軸 (0.54) m、短軸 (0.53) m、壁現高 0.39 m。 **面積** 9.27 m<sup>2</sup> **床面** ほぼ平坦で硬化面は所々確認できるが広がりをみせない。 **竈** 東壁か西壁に位置していたと考えられるが W-1 によって焼失している。 **住居内施設** 壁周溝。 **重複** W-1 と重複しており、新旧関係は H-2→W-1 である。 **出土遺物** 少量である。須恵器蓋（1）、土師器坏（2）を図示。 **時期** 出土遺物が少量ではあるが須恵器蓋と土師器坏から 7 世紀代後半と考えられる。

H-3 (Fig. 7・8・15, PL. 2・5)

**位置** X 194・195, Y 107・108 グリッド **主軸方向** N-92°-E **規模** 長軸 (3.90) m、短軸 (3.75) m、壁現高 0.45 m。 **面積** 10.32 m<sup>2</sup> **床面** ほぼ平坦で中央部に硬化面が広がる。 **竈** 東壁に位置する。確認長 (0.61) m、燃焼部幅 0.45 m。天井部は完全に崩落しており、構築材は灰黄褐色の粘質土を使用している。火床面は焼土化し、焚口周辺には灰が薄く堆積している。袖の残存長は右袖 (0.54) m、左袖 (0.38) m であり、右袖に関しては角閃石凝灰岩を芯材として用いている。 **住居内施設** 壁周溝。 **重複** W-3・4 と重複しており、新旧関係は H-3→W-3・4 である。 **出土遺物** 土師器坏（1）、甕（2・3）、こも編み石（4～7）を図示。 **時期** 土師器坏、甕から 7 世紀代後半と考えられる。 **備考** 住居跡東壁・竈煙道部については調査区拡張の際に確認されたものであり、時間の制約上今回は住居跡範囲の確認のみとした。

H-4 (Fig. 8, PL. 2・3)

**位置** X 190・191, Y 110・111 グリッド **主軸方向** N-102°-W **規模** 長軸 4.58 m、短軸 (4.46) m、壁現高 0.42 m。 **面積** 15.62 m<sup>2</sup> **床面** ほぼ平坦で中央部に硬化面が広がる。 **竈** 西壁やや南側に位置する。確認長 (0.79) m、燃焼部幅 0.42 m。残存状況は悪く煙道部は W-1 によって消失している。袖は右袖に構築材である灰黄褐色粘質土が僅かに残るのみで左袖は構築材も残っていない。焚口周辺の床面は若干硬化しており、火床面は緩く窪むだけ焼土・灰は確認されなかった。 **住居内施設** 柱穴 4 基、壁周溝。 **重複** A-1・W-1 と重複しており、新旧関係は H-4→A-1→W-1 である。 **出土遺物** 少量である。本住居跡に帰属すると考えられる土師器坏が竈内から出土したが小片であるため図示し得なかった。 **時期** 出土遺物が皆無に等しく時期判別が困難であるが、竈内から出土した土師器坏小片や床面・柱穴等の住居構造、覆土状況をみると 7 世紀代に収まるものと考えられる。 **備考** 覆土上層は A-1 の掘り方覆土であり非常に硬化している。南壁は W-1 によって消失。

H-5 (Fig. 9・15・16, PL. 3・15)

**位置** X 195・196, Y 113 グリッド **主軸方向** N-2°-W **規模** 長軸 3.86 m、短軸 2.94 m、壁現高 0.31 m。  
**面積** 8.16 m<sup>2</sup> **床面** ほぼ平坦で中央部に硬化面が広がる。 **竈** 北壁やや東よりに位置する。確認長 (0.72) m、燃焼部幅 0.62 m。天井部は完全に崩落しており、構築材は灰黄褐色の粘質土を使用している。火床面は緩く窪み、焚口周辺には焼土・灰が散っている。袖は確認されなかった。内部には角閃石安山岩を角柱状に加工した支脚が立ち、上部に坏（1）を天地逆に被せて竈に掛けた甕をしっかりと支えるようにしてある。支脚と小皿の間には



ズレないように粘土で接着されており、火を受けて焼土化している。 **出土遺物** かわらけ状の坏（1～3）・高台塊（4・5）、瓦、雁文鏡（6）。 **時期** 小皿・高台塊から10世紀後半と考えられる。

#### H-6 (Fig. 9・16, PL. 3・6)

**位置** X 193, Y 108-109 グリッド **主軸方向** N - 90°-E **規模** 長軸 3.62 m、短軸 3.08 m、壁現高 0.41 m。  
**面積** 8.71 m<sup>2</sup> **床面** ほぼ平坦で中央部に硬化面が広がる。 **竈** 東壁南隅に位置する。確認長 1.18 m、燃焼部幅 0.43 m。内部には石英閃緑岩を角柱状に加工した支脚（5）が立つ。火床面は緩く窪み、焚口周辺には焼土・灰が散っている。袖は確認されなかった。 **住居内施設** なし **出土遺物** 灰釉陶器小皿（1）、土師質高台塊（2・3）、羽釜（4）。 **時期** 出土遺物から11世紀前半と考えられる。

#### A-1 (Fig.10, PL. 3)

**位置** X 190・191, Y 107 ~ 113 グリッド **主軸方向** N - 3°-W **規模** 長さ (23.80) m 最大幅 (6.38) m **形状等** 中央部は若干の凹凸がみられるがほぼ平坦で西側と東側に側溝が付属する。道路面は周辺部の地表から一段掘り込まれており、北から南へ緩やかに傾斜している。W-1から南側に関しては道構確認時の掘削によって道路面と西側側溝が残存するのみである。 **硬化面** 側溝部分を除きほぼ全域で検出。調査区北壁付近では硬化面上で砂礫が敷設された状況が確認でき、他の箇所でも部分的に砂礫が残る。砂礫敷設面は硬く練まっており最終段階の路面であると考えられる。また場所によっては硬化した黒褐色土の下に地山である黄褐色土の硬化面もみられ、東側側溝路の段上にも若干の硬化面の拡がりがみられる。H-4と重複する箇所は他と同様に硬化面が構築されており、H-4 土層断面でも確認できる。 **側溝** 西側側溝は断面が浅いレンズ状で調査区北壁から南壁に掛けて断続的に確認できる。東側側溝については当初A-1に関連しない別道構と考えたが土層断面観察での上層からの掘り込みや別道構と裏付ける根拠を見出すことができないため、今報告ではA-1に付属する側溝として記載した。断面U字状を呈し、調査区北壁からW-1までの間でのみ確認された。 **掘り方** 土層断面観察から道路面は非常に硬化した暗褐色土で構成されており、下層は暗褐色土と地山である黄褐色砂質土が混じる。また道構面観察からは補修等の痕跡は確認されなかった。 **重複** H-4、W-1・6、D-12、D B-1と重複しており、新旧関係はH-4 → A-1 → W-1・6、D-12、DB-1である。 **出土遺物** 土師器、須恵器・瓦等の破片が出土しているが本道構の年代を示すような遺物は確認できなかった。 **時期** 出土遺物からは時期が特定できないため他道構との重複関係からH-4埋没後（7世紀以降）から中世（W-1）の間に位置づけたい。

#### W-1 (Fig.11・16, PL. 4・6)

**位置** X 189 ~ 195, Y 109-110 グリッド **主軸方向** N - 83°-W **規模** 長さ (23.19) m 最大幅 上幅 4.49 m、下幅 2.28 m 深さ 1.18 m **形状等** 断面逆台形。底面は非常に硬化し、東から西へ向かって緩やかに傾斜する。  
**重複** H-2・4、A-1、W-3・4、D-11、DB-1~3、P-10、1号火葬跡と重複しており、新旧関係はH-2・4、A-1、W-3・4、D-11・12、P-10、1号火葬跡→W-1→DB-1~3である。  
**出土遺物** 少量であるが、覆土中よりかわらけ（1）、五輪塔水輪（2）、上層からは馬齒が数点出土している。  
**時期** 覆土の状況・出土遺物から中世と考えられる。 **備考** 土層断面観察で埋設時に数回の流水の痕跡があったと確認できる。苔海城の堀跡か。

#### W-2 (Fig.12, PL. 4)

**位置** X 196, Y 109 ~ 113 グリッド **主軸方向** N - 8°-E **規模** 長さ (17.45) m 最大幅 上幅 (1.07) m、下幅 (0.80) m 深さ (0.71) m **形状等** 南北方向に直線的に走行する。部分的な検出のため全体の断面形状は不明だが現状からは逆台形と推測される。 **重複** W-5、D-5、I-1と重複しており、新旧関係はW-5、D-5、I-1→W-2である。 **出土遺物** 少量である。土師器小片。 **時期** 覆土の状況から中世と考えられる。 **備考** 苔海城の堀跡か。



### W-3 (Fig.12, PL. 4)

**位置** X 191 ~ 194, Y 108 ~ 113 グリッド **主軸方向** N - 30° - W **規模** 長さ (26.36) m 最大幅 上幅 2.20 m、下幅 1.83 m 深さ 0.20 m **形状等** 断面は浅いレンズ状を呈する。底面は所々凹凸があるが概ね平坦である。調査区北側で段を有する。 **重複** H - 2・3、W - 1、D - 11と重複しており、新旧関係はH - 2・3、D - 11 → W - 3 → W - 1である。 **出土遺物** 少量である。 **時期** 覆土の状況から中世と考えられる。

### W-4 (Fig.12, PL. 4)

**位置** X 192 ~ 194, Y 110 ~ 112 グリッド **主軸方向** N - 33° - W **規模** 長さ (10.57) m 最大幅 上幅 1.79 m、下幅 1.40 m 深さ 0.21 m **形状等** 断面は浅いレンズ状を呈する。底面は所々凹凸があるが概ね平坦である。 **重複** H - 2・3、W - 1と重複しており、新旧関係はH - 2・3 → W - 3 → W - 1である。 **出土遺物** 少量である。 **時期** 覆土の状況から中世と考えられる。

### W-5 (Fig.12, PL. 4)

**位置** X 194 ~ 196, Y 109 ~ 113 グリッド **主軸方向** N - 28° - W **規模** 長さ (17.25) m 最大幅 上幅 0.73 m、下幅 0.52 m 深さ 0.12 m **形状等** 断面は浅いレンズ状を呈する。底面は所々凹凸があるが概ね平坦である。 **重複** D - 2・6と重複しており、新旧関係はD - 2・6 → W - 5である。 **出土遺物** 少量である。 **時期** 覆土の状況から中世と考えられる。

### W-6 (Fig.12)

**位置** X 191, Y 112・113 グリッド **主軸方向** N - 7° - E **規模** 長さ (3.34) m 最大幅 上幅 0.77 m、下幅 0.40 m 深さ 0.17 m **形状等** 断面は浅いU字状を呈する。底面はほぼ平坦である。 **重複** A - 1と重複しており、新旧関係はA - 1 → 本遺構である。 **出土遺物** 出土遺物が少量である。 **時期** 覆土の状況から中世と考えられる。

### DB-1 (Fig.13, PL. 4)

**位置** X 191, Y 109 グリッド **主軸方向** N - 98° - E **規模** 長軸 1.21 m、短軸 0.75 m、深さ 0.37cm。 **形状等** 四丸長方形。 **人骨出土状態** 残存状態は悪く、頭部のみ出土。右側頭部欠損。 **埋葬状態** 被葬者の頭位は東で、顔面部を南側に向け左側を下にした横臥屈葬であると考えられる。 **重複** W - 1と重複しており、新旧関係は人骨の出土状況からW - 1 → DB - 1である。 **出土遺物** なし。 **時期** 形状・埋葬形態等から中世と考えられる。

### DB-2 (Fig.13, PL. 4)

**位置** X 193, Y 109 グリッド **主軸方向** N - 103° - E **規模** 長軸 0.91 m、短軸 0.52 m、深さ 0.27cm。 **形状等** 四丸長方形。 **人骨出土状態** 残存状態は不良。右側頭部が土圧によって崩落。 **埋葬状態** 被葬者の頭位は西で、顔面部を北側に向け左側を下にした横臥屈葬であると考えられる。 **重複** W - 1と重複しており、新旧関係は人骨の出土状況からW - 1 → DB - 2である。 **出土遺物** なし。 **時期** 形状・埋葬形態等から中世と考えられる。

### 1号火葬跡 (Fig.13・16, PL. 4)

**位置** X 192, Y 109 グリッド **張出部軸方向** N - 85° - E **規模** 長方形土坑部長軸 1.08 m・短軸 0.54 m、張出部長軸 0.31 m・短軸 0.22 m、深さ 0.13cm。 **形状等** 長方形土坑部と張出部で構成され、平面「T」字状を呈する。W - 1の掘り込みによって大部分が消失しており底面のみである。長方形土坑部底面は平坦であり、張出部と接する壁面で被熱痕跡が僅かであるが確認できる。張出部底面は長方形土坑部より外側に向かって緩やかに上がる。 **人骨出土状態** 本遺構の覆土は炭化物・灰を主体に少量の焼骨が混在していることが確認された。残存状況は悪く、部位については小片であるため特定できない。 **重複** W - 1と重複しており、新旧関係は覆土状況からW - 1 → 1号火葬跡である。 **出土遺物** 古銭（元祐通宝、1）が覆土中より出土。被熱痕跡は確認できない。 **時期** 古銭・重複関係から中世と考えられる。



Fig. 5 調査区全体図

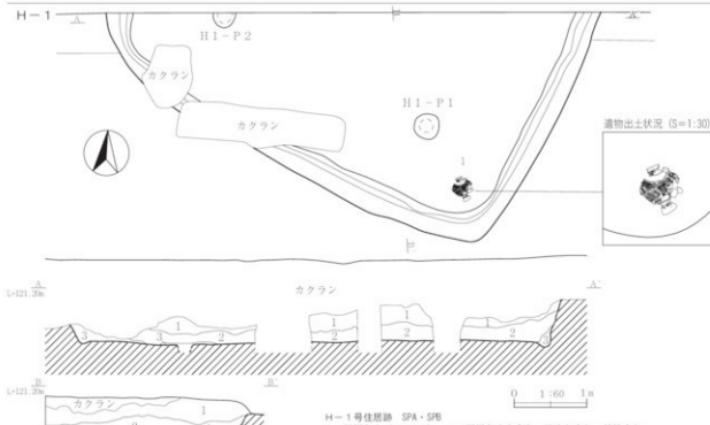


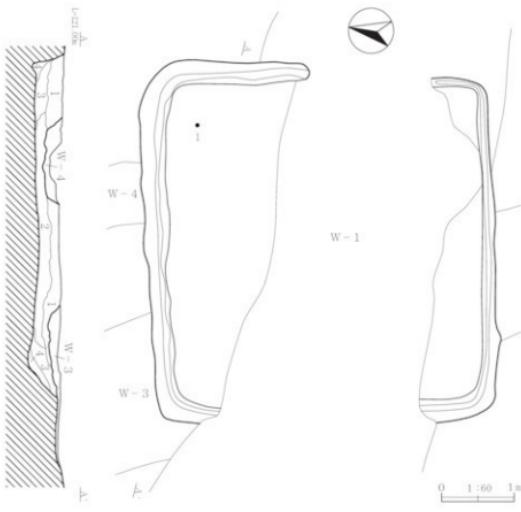
Fig. 6 H-1号住居跡



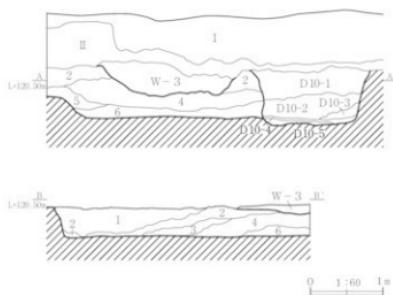
## H - 2

### H - 2号住居跡 SPA

- 1 剛褐色土 (10YR3/3)  
小塊、ロームブロックを微量含む。  
縦まり有り、粘性有り。
- 2 剛褐色土 (10YR3/3)  
ロームブロックを少量含む。  
縦まり有り、粘性有り。
- 3 黒褐色土 (10YR3/2)  
ロームブロックを少量含む。  
縦まり有り、粘性有り。
- 4 黑褐色土 (10YR3/2)  
黄褐色砂質土を微量含む。  
縦まり有り、粘性有り。



## H - 3・D - 10



※調査区拡張部についてはプラン確認のみ。

- H - 3号住居跡、D - 10号土坑 SPA・SPB
- 1 にぶい黄褐色土 (10YR4/3) ロームブロックを含む。縦まり有り。粘性有り。
  - 2 剛褐色土 (10YR3/3) ローム粒を少量含む。縦まり有り。粘性有り。
  - 3 黑褐色土 (10YR3/1) 砂玉体。微土粒を少量含む。
  - 4 にぶい黄褐色土 (10YR4/3) 硅土粒を中心、ロームブロックを少量含む。
  - 5 剛褐色土 (10YR3/3) 硅土粒を中心、ロームブロックを少量含む。
  - 6 剛褐色土 (10YR3/3) ロームブロックを少量含む。縦まり有り。粘性有り。
  - D10-1 黑褐色土 (10YR3/2) ローム粒を中心含む。縦まり有り。粘性有り。
  - D10-2 黑褐色土 (10YR3/2) ローム粒を微量含む。縦まり有り。粘性有り。
  - D10-3 黑褐色土 (10YR3/2) ローム粒を微量含む。縦まり有り。粘性有り。
  - D10-4 黄褐色土 (10YR4/4) ロームブロック主体。縦まりやや強い。粘性やや強い。
  - D10-5 黑褐色土 (10YR3/1) ローム粒を少量含む。縦まり有り。粘性有り。

Fig. 7 H - 2・3号住居跡、D - 10号土坑

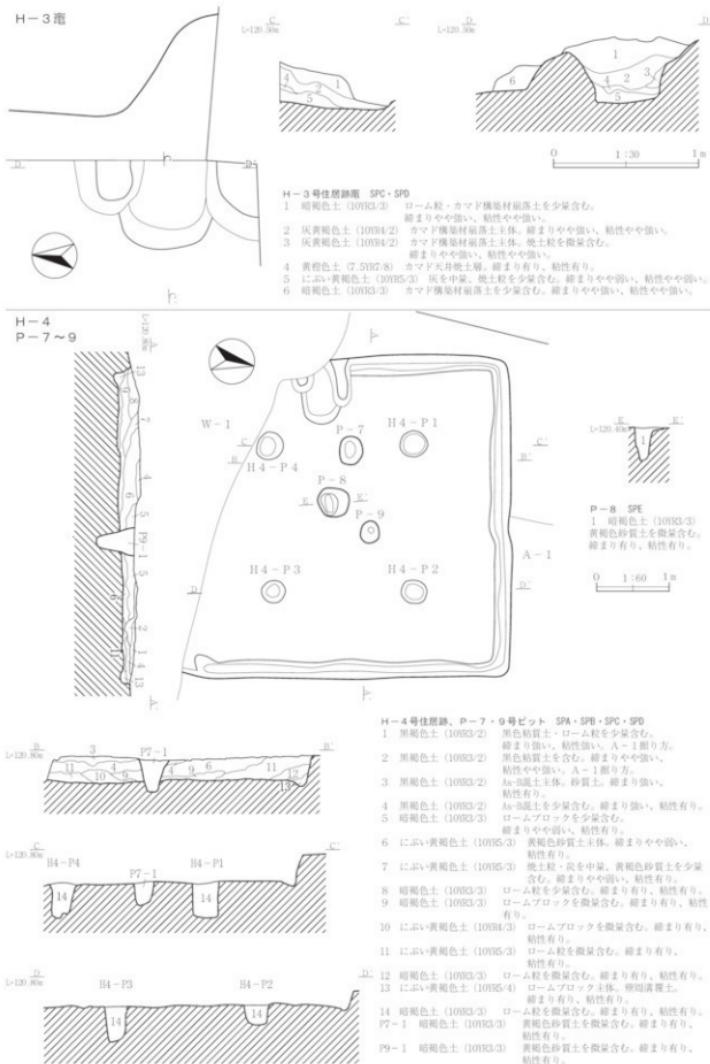


Fig. 8 H-3号住居跡、H-4号住居跡、P-7～9号ビット

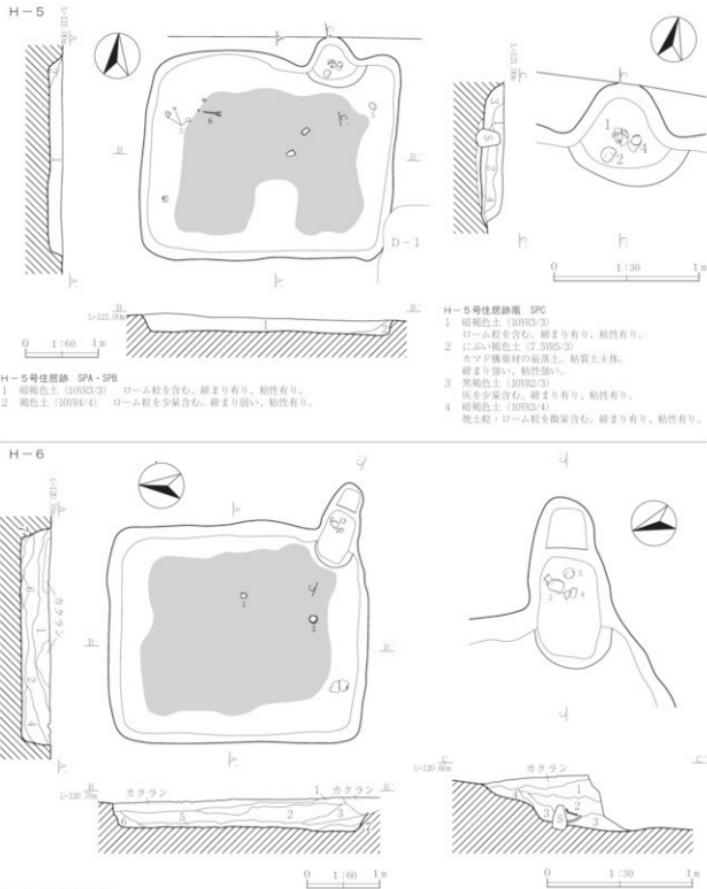
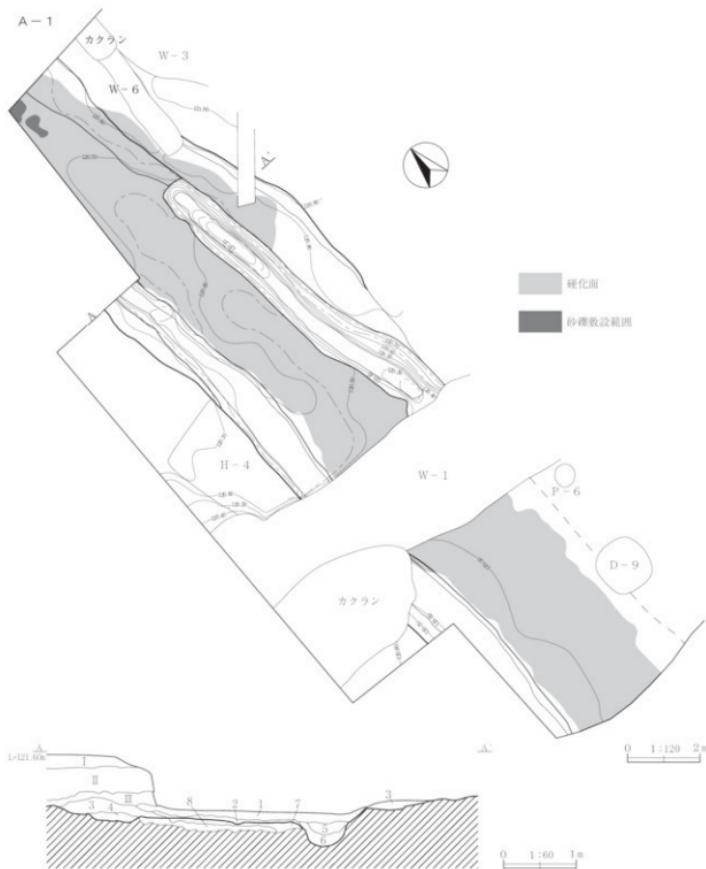


Fig. 9 H-5・6号住居跡



- A-1号道路状遺構 SP-A
- 1 暗褐色土 (10YR3/3) 小礫を少量含む。やや砂質。緻まりやや強い。粘性やや強い。
  - 2 暗褐色土 (10YR3/4) 1層に黄褐色砂質土が少量混じる。緻まりやや強い。粘性やや強い。
  - 3 暗褐色土 (10YR3/4) 小礫を少量含む。
  - 4 暗褐色土 (10YR3/4) 小礫を少量含む。西側有溝底土。緻まり有り。粘性有り。
  - 5 暗褐色土 (10YR3/4) 小礫を少量含む。東側有溝底土。緻まり有り。粘性有り。
  - 6 暗褐色土 (10YR3/4) 小礫・黄褐色砂質土を少量含む。砂質土。東側有溝底土。緻まり有り。粘性有り。
  - 7 にじみ黄褐色土 (10YR4/3) 黒色粘質土を少量含む。
  - 8 にじみ黄褐色土 (10YR4/3) 黑色粘質土。黄褐色砂質土を少量含む。緻まりやや強い。粘性やや強い。

Fig. 10 A-1号道路状遺構



W-1

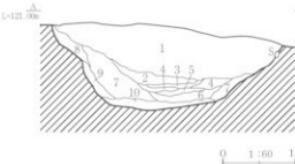
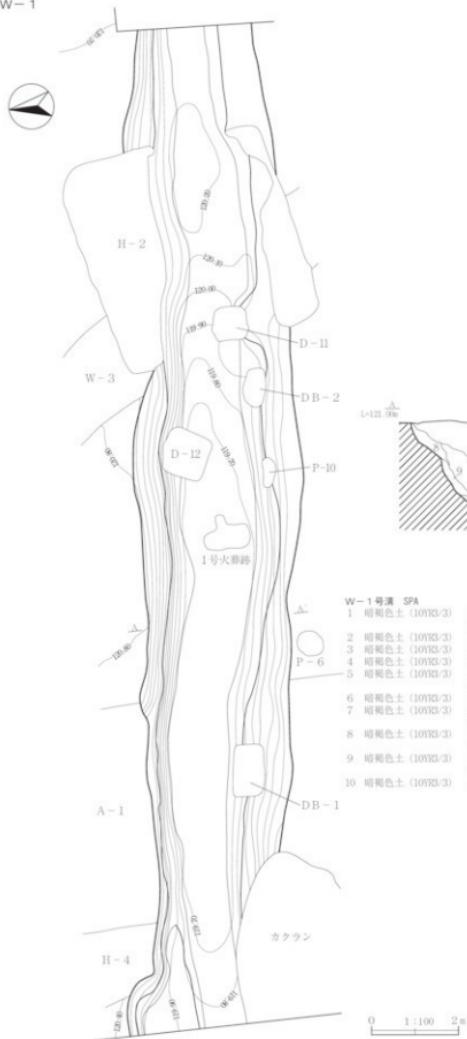
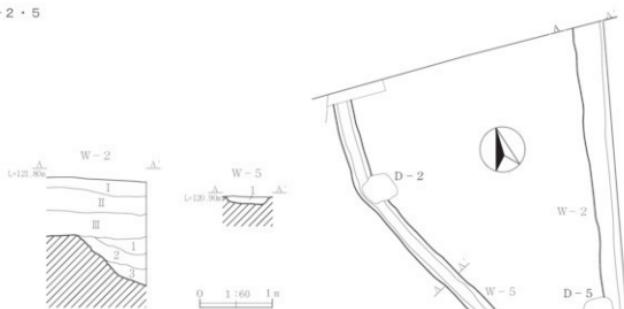


Fig.11 W-1号溝



W-2・5



W-3・4・6

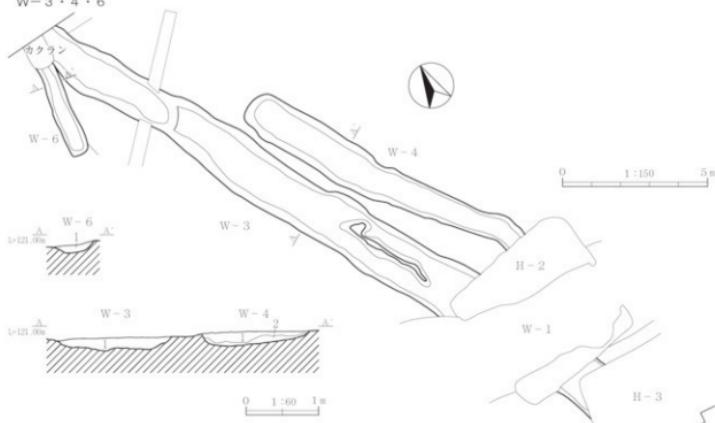


Fig.12 W-2～6号溝

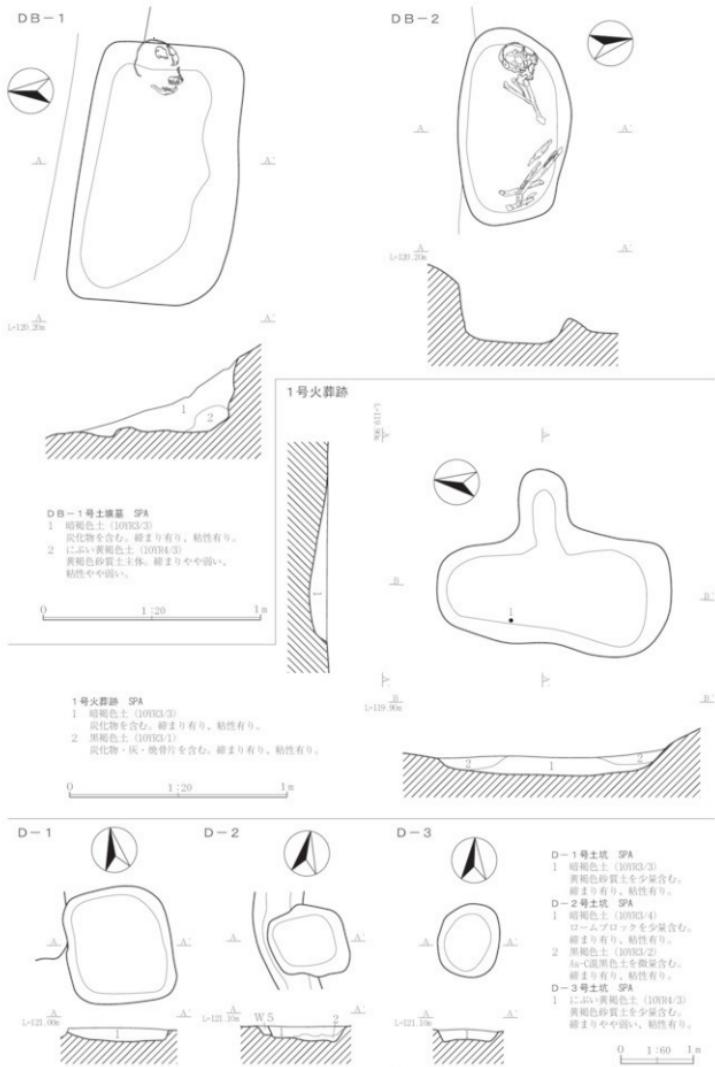
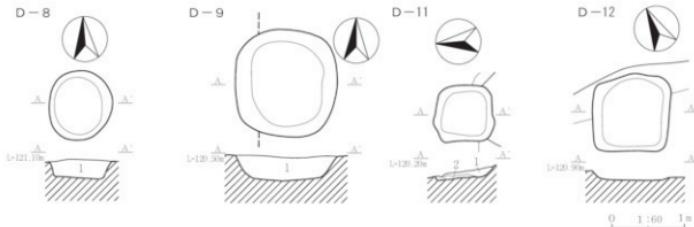
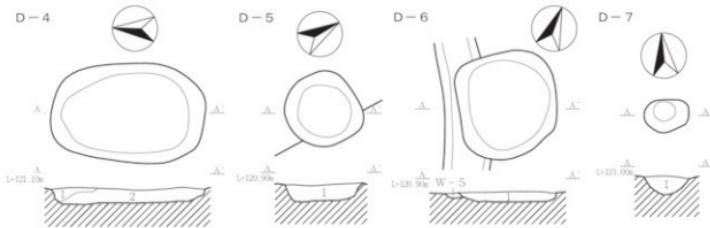


Fig.13 DB-1・2号土壤墓、1号火葬跡、D-1～3号土坑



**D - 4号土坑 SPA**

- 1 にぶい黄褐色土 (10YR4/3)  
黄褐色砂質土を少暈含む。締まりやや弱い、粘性有り。
- D - 5号土坑 SPA  
1 にぶい黄褐色土 (10YR4/3)  
黄褐色砂質土を少暈含む。締まりやや弱い、粘性有り。
- D - 6号土坑 SPA  
1 黄褐色土 (10YR3/3)  
黄褐色砂質土を少暈含む。締まり有り、粘性有り。

**D - 7号土坑 SPA**

- 1 黄褐色土 (10YR3/3)  
黄褐色砂質土を少暈含む。締まり有り、粘性有り。
- D - 8号土坑 SPA  
1 にぶい黄褐色土 (10YR4/3)  
黄褐色砂質土を少暈含む。締まり有り、粘性有り。

**D - 9号土坑 SPA**

- 1 黄褐色土 (10YR3/3)  
黄褐色砂質土・黑土を少暈含む。  
締まり有り、粘性有り。
- D - 10号土坑 SPA  
1 黄褐色土 (10YR3/3)  
云母化物主体。締まり有り、粘性有り。
- 2 黄褐色土 (10YR3/3)  
云母化物を少暈含む。締まり有り、粘性有り。

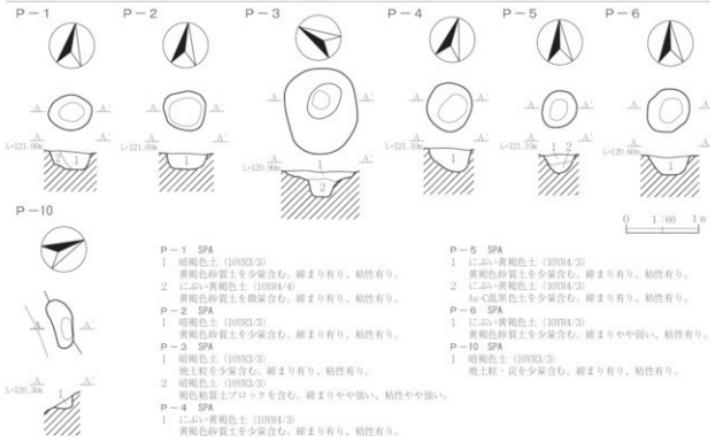


Fig.14 D - 4 ~12号土坑、P - 1 ~ 6・10号ピット

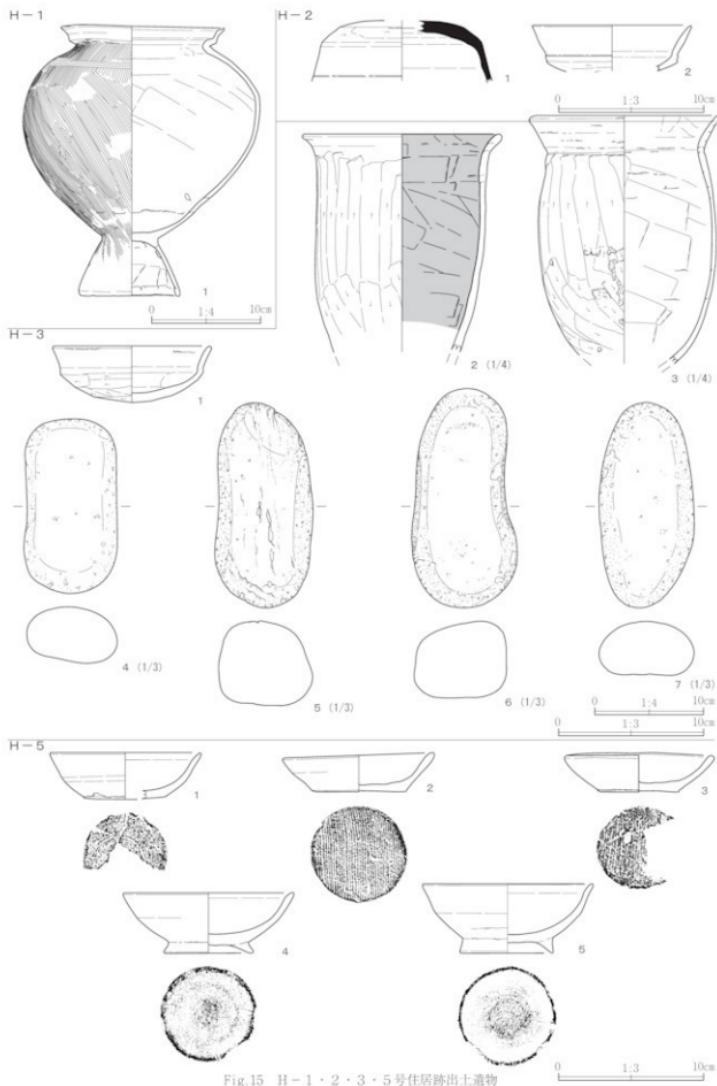


Fig.15 H-1 · 2 · 3 · 5号住居跡出土遺物

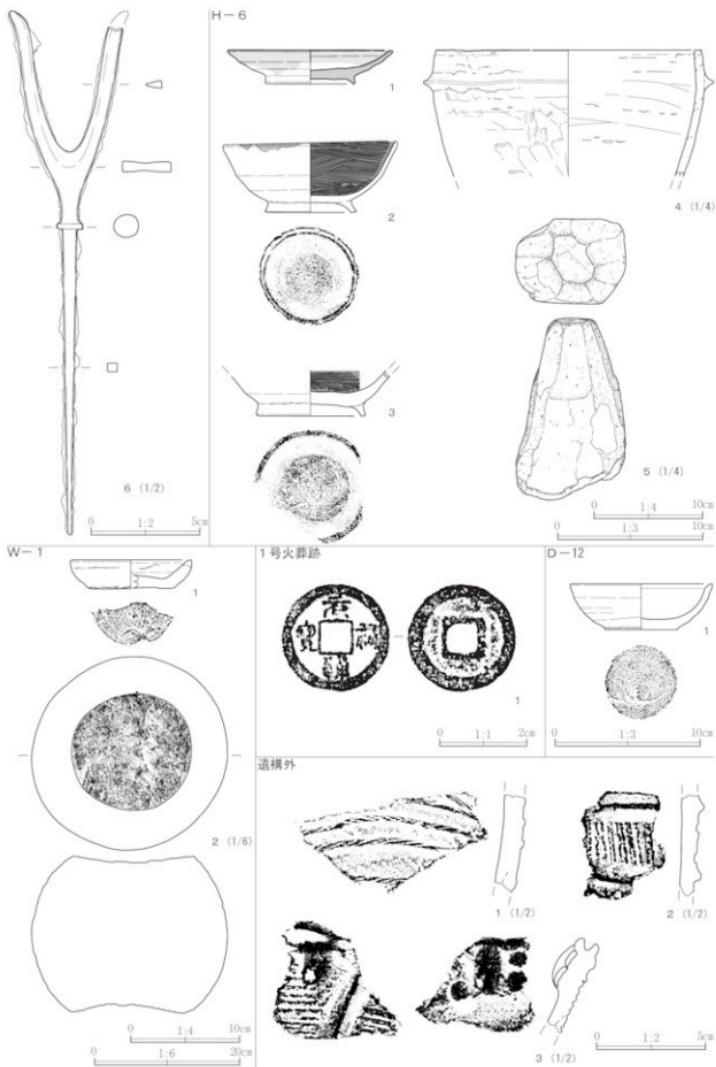


Fig.16 H-5·6号居住跡、W-1号溝、1号火葬坑、D-12号土坑、遺物外出土遺物

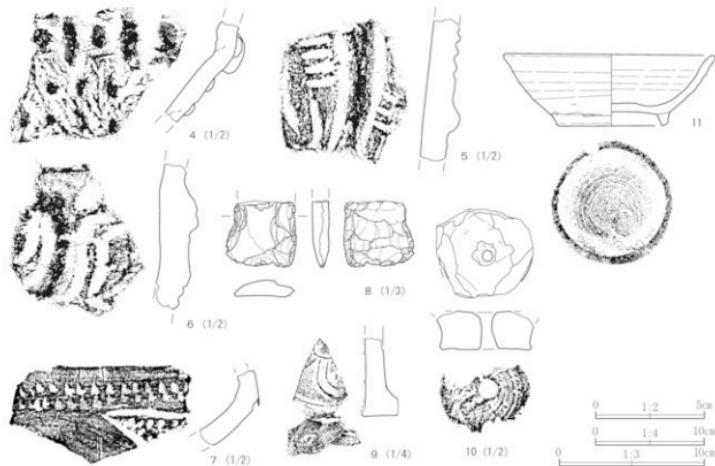


Fig. 17 遺構外出土遺物

Tab. 3 出土遺物観察表

H-1									器形、成・整形、文様等の特徴		残存状況、備考	
番号	出土位置	種別	器種	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	胎土	焼成	色調			
1	床面直上	石門扉	石門扉	15.0	9.1	24.9	白・灰白色 泥質白・灰	良好	に深い黒褐色	外周に横縞模様、竪縞模様ハチメ及び竪縞ハチメ。 以降斜面ハチメ；内面に横縞模様コロナ、以下ハチメ。 内面ハチメ及び側面。	側面小判・底丸。 外周裏面平行行。	
2	床面直上	土脚部	土脚部	—	—	—	白・灰白色	良好	灰色	外周に横縞模様コロナによるコロナ、底付ハチメ及び側面ハチメ。	側面1.8cm丸。	
3	床面直上	土脚部	土脚部	10.0	—	—	白・灰白色	良好	灰色	外周に横縞模様コロナによるコロナ、底付ハチメ及び側面ハチメ。	側面1.4cm丸。	
4	床面直上	土脚部	土脚部	17.9	—	(20.0)	白・灰白色 泥質白	良好	に深い黒褐色 泥質白	外周に横縞模様コロナ、底付ハチメ及び側面ハチメ。 下脚部ハチメ。	側面大丸。 内部平行行。	
5	床面直上	土脚部	土脚部	17.1	—	(22.0)	白・灰白色 泥質白	良好	灰色	外周に横縞模様コロナ、底付ハチメ及び側面ハチメ。 下脚部ハチメ。	側面大丸。 内部平行行。	
H-2									器形、成・整形、文様等の特徴		残存状況、備考	
番号	出土位置	種別	器種	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	胎土	焼成	色調			
1	床面直上	灰器	灰器	—	—	—	白・灰白色	良好	灰色	外周に横縞模様コロナ、底付ハチメ及び側面ハチメ。	側面1.8cm丸。	
2	床面直上	土脚部	土脚部	—	—	—	白・灰白色	良好	灰色	外周に横縞模様コロナ、底付ハチメ及び側面ハチメ。	側面1.4cm丸。	
H-3									器形、成・整形、文様等の特徴		残存状況、備考	
番号	出土位置	種別	器種	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	胎土	焼成	色調			
1	床面直上	土脚部	土脚部	10.8	—	3.5	白・灰白色	良好	灰色	外周に横縞模様コロナ、底付ハチメ及び側面ハチメ。	1.2cm丸。	
2	床面直上	土脚部	土脚部	17.9	—	(20.0)	白・灰白色 泥質白	良好	に深い黒褐色 泥質白	外周に横縞模様コロナ、底付ハチメ及び側面ハチメ。 下脚部ハチメ。	側面大丸。 内部平行行。	
3	床面直上	土脚部	土脚部	17.1	—	(22.0)	白・灰白色 泥質白	良好	灰色	外周に横縞模様コロナ、底付ハチメ及び側面ハチメ。 下脚部ハチメ。	側面大丸。 内部平行行。	
H-4									器形、成・整形、文様等の特徴		残存状況、備考	
番号	出土位置	種別	器種	高さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	石質	焼成	色調			
4	床面直上	石頭	石頭	12.0	6.4	4.1	鶴岡安山岩	—	—	560.5	—	完存。
5	床面直上	石頭	石頭	14.2	6.8	5.9	鶴岡安山岩	—	—	861.3	—	完存。
6	床面直上	石頭	石頭	15.1	7.3	5.4	鶴岡安山岩	—	—	918.1	—	完存。
7	床面直上	石頭	石頭	14.2	6.7	3.8	鶴岡安山岩	—	—	529.0	—	完存。
H-5									器形、成・整形、文様等の特徴		残存状況、備考	
番号	出土位置	種別	器種	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	胎土	焼成	色調			
1	床面直上	土脚部	土脚部	10.3	5.7	(3.2)	白・灰白色	良好	に深い黒褐色	外周に横縞模様コロナによるコロナ、底付ハチメ及び側面ハチメ。	1.2cm丸。	
2	床	土脚部	土脚部	10.3	6.5	2.7	白・灰白色	中性	浅灰色	外周に横縞模様コロナによるコロナ、底付ハチメ及び側面ハチメ。	側面大丸。 内部平行行。	かわらけ状。
3	床	土脚部	土脚部	10.0	5.5	2.7	中性	良好	に深い黒褐色	外周に横縞模様コロナによるコロナ、底付ハチメ及び側面ハチメ。	2.2cm丸。	かわらけ状。
4	床面直上	土脚部	土脚部	11.0	6.0	4.2	白・灰白色	良好	灰色	外周に横縞模様コロナによるコロナ、底付ハチメ及び側面ハチメ。	側面大丸。	完存。
5	床面直上	土脚部	土脚部	11.6	6.3	4.8	白・灰白色	中性	に深い黒褐色	外周に横縞模様コロナによるコロナ、底付ハチメ及び側面ハチメ。	側面大丸。	完存。
番号	出土位置	種別	器種	高さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	石質	焼成	色調	重さ(g)	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状況、備考
6	床面直上	石頭	石頭	24.2	14.9	1.0	—	—	—	42.1	—	右先端欠損。



## H-6

番号	出土位置	種別、留傳	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	胎土	焼成	色調	器物、成・整形、文様等の特徴		保存状況、備考
									裏(a)	裏b、成・整形、文様等の特徴	
1	層土	灰陶脚鉢	(11.2)	8.6	2.3	黒色粘	良好	に深い黄褐色 外周に暗い赤褐色の付着部	外周に暗い赤褐色の付着部によるヨコナタ。底面焼成未切り。	天保2年式。 1-2個。	
2	地	土師質 高台碗	11.7	9.8	4.9	白・青色粘	良好	に深い黄褐色 外周に暗い赤褐色の付着部	外周に暗い赤褐色の付着部によるヨコナタ。底面焼成未切り。	天保2年式。 1-2個。	
3	床面直上	土師質 西古碗	-	7.0	(3.1)	白・青色粘	良好	に深い黄褐色 外周に暗い赤褐色の付着部	外周に暗い赤褐色の付着部によるヨコナタ。底面焼成未切り。	天保2年式。	
4	地	土師質 伝脛	(28.3)	-	(11.6)	白・青色粘	焼成強	に深い黄褐色 黒墨斑	外周に暗い赤褐色の付着部。内側に底面焼成未切り。	天保2年式。 1-2個。	
5	地	石器類	16.8	10.1	7.8	石質	焼成	色調	裏(a)	器物、成・整形、文様等の特徴	保存状況、備考
5	地	石器類	16.8	10.1	7.8	石質	焼成	色調	裏(a)	上端部分が削割状に平らな面を 有する。	保存状況、備考

## W-1

番号	出土位置	種別、留傳	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	胎土	焼成	色調	器物、成・整形、文様等の特徴		保存状況、備考	
									裏(a)	裏b、成・整形、文様等の特徴		
1	層土	かわらけ	(8.2)	(6.0)	2.0	白・青色粘少	良好	に深い黄褐色 外周に暗い赤褐色の付着部	外周に暗い赤褐色の付着部によるヨコナタ。底面焼成未切り。	天保2年式。 1-2個。		
番号	出土位置	種別、留傳	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	胎土	焼成	色調	裏(a)	器物、成・整形、文様等の特徴	保存状況、備考	
2	層土	石器類	16.0	20.6	21.6	粗粒粘土	-	-	-	1580	定形。	

## D-12

番号	出土位置	種別、留傳	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	胎土	焼成	色調	器物、成・整形、文様等の特徴		保存状況、備考
									裏(a)	裏b、成・整形、文様等の特徴	
1	層土	土師質 瓢	(9.7)	5.0	3.2	黒・青色粘	良好	明黄色	外周に暗い赤褐色の付着部 内側に底面焼成未切り。	口幅14-底面焼成未切り。	

## 1号火葬跡

番号	出土位置	種別、留傳	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	胎土	焼成	色調	器物、成・整形、文様等の特徴		保存状況、備考
									裏(a)	裏b、成・整形、文様等の特徴	
1	層土	土師質 瓢	-	-	-	-	-	-	-	-	定形。

## 遺構外

番号	出土位置	種別、留傳	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	胎土	焼成	色調	器物、成・整形、文様等の特徴		保存状況、備考	
									裏(a)	裏b、成・整形、文様等の特徴		
1	表層	圓文土器 瓢	-	(4.4)	-	白色粘	圓文土器	白色	斜面に深い凹溝と鋸歯状の縁。	斜面A-底面B。		
2	表層	圓文土器 瓢	-	(4.6)	-	白色粘	圓文土器	白色	斜面に深い凹溝と鋸歯状の縁。	斜面A-底面B。		
3	表層	圓文土器 瓢	-	(4.4)	-	白色粘	圓文土器	白色	斜面に深い凹溝と鋸歯状の縁。	斜面A-底面B。		
4	表層	圓文土器 瓢	-	(5.2)	-	白色粘	圓文土器	白色	斜面に深い凹溝と鋸歯状の縁。	斜面A-底面B。		
5	表層	圓文土器 瓢	-	(6.4)	-	白色粘	圓文土器	白色	斜面に深い凹溝と鋸歯状の縁。	斜面A-底面B。		
6	表層	圓文土器 瓢	-	(6.6)	-	白色粘	圓文土器	白色	斜面に深い凹溝と鋸歯状の縁。	斜面A-底面B。		
7	表層	圓文土器 瓢	-	(3.9)	-	白色粘	圓文土器	白色	斜面に深い凹溝と鋸歯状の縁。	斜面A-底面B。		
8	表層	石器類	(4.5)	4.9	1.2	黑色石質	底面	-	-	34.0	-	
9	出土位置	種別、留傳	全長(cm)	底径(cm)	厚さ(cm)	胎土	焼成	色調	裏(a)	器物、成・整形、文様等の特徴	保存状況、備考	
9	表層	丸丸	(7.2)	-	-	白色粘	圓文	白色	-	-	定形。	
10	表層	土器	4.8	1.6	0.8	チャート	良好	に深い黄褐色	上部横刃による削痕と刃先磨耗。	30.7	上部欠損。刃先削耗。	
11	表層	種別、留傳	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	胎土	焼成	色調	裏(a)	器物、成・整形、文様等の特徴	保存状況、備考	
11	表層	石器類	14.3	7.0	5.0	小標	焼成強	浅黄色	底面に暗い赤褐色の付着部によるヨコナタ。	底面ハラタズリ。	底面焼成未切り。刃先のちりヨコナタ。	

Tab. 5 井戸・土坑・ピット計測表

測定名	位 置	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	形 状	出 土 物	備 考
I-1	X196、Y110	-	0.95	0.69	-	-	底部は切削のみで壁は丸みです。
D-1	X196、Y113	1.65	-	1.57	-	円形	
D-2	X194、Y95、Y112-113	1.12	1.01	0.21	隅丸形	-	
D-3	X196、Y112	-	1.01	0.84	-	隅丸形	
D-4	X196、Y113	-	1.17	1.32	0.23	隅丸形	
D-5	X196、Y111	-	0.59	0.65	0.25	隅丸形	
D-6	X194、Y110-111	1.51	1.45	0.14	円形	-	
D-7	X194、Y95、Y111	0.62	0.45	0.26	隅丸形	-	
D-8	X193、Y112	1.01	0.88	0.27	円形	-	
D-9	X191、Y92、Y108	1.49	1.41	0.36	円形	-	
D-10	X194、Y107-108	1.48	0.90	0.76	円形	-	
D-11	X193、Y94、Y109	0.85	0.80	0.19	隅丸形か	-	
D-12	X193、Y109	1.10	1.08	0.13	隅丸形	土師質环	
P-1	X195、Y112	0.60	0.50	0.26	隅丸形	-	
P-2	X195、Y112	0.58	0.54	0.22	円形	-	
P-3	X194、Y111	0.60	0.50	0.36	円形	-	
P-4	X194、Y111	0.60	0.65	0.23	円形	-	
P-5	X194、Y109	0.50	0.49	0.27	円形	-	
P-6	X192、Y109	0.39	0.58	0.27	円形	-	
P-7	X190、Y110	0.39	0.32	0.44	円形	-	
P-8	X190、Y110	0.43	0.40	0.46	円形	-	
P-9	X190、Y110	0.31	0.25	0.52	円形	-	
P-10	X193、Y109	0.68	0.32	0.19	不整形	-	



## VI まとめ

今回の調査では古墳時代前期、古墳時代後期、平安時代、中世に亘る遺構が確認された。ここでは確認された遺構・遺物に若干の考察を加え、まとめとしたい。

### 古墳時代前期

本遺跡は権現山東南麓の相馬ヶ原扇状地末端で牛池川の開折する帶状低地の南側台地に立地する。牛池川並びに本道路南西方向の染谷川沿いには古墳時代前期の集落が点在しており、元経社苔海道路群地域では特に牛池川に近い所で確認されている。本遺跡で確認されたH-1もその一群であると考えられる。当地域は牛池・染谷川の帶状低地を生產域とし、河川に近い台地上を居住域としていたと考えられる。

### 古墳時代後期

本遺跡で確認された概期の遺構はH-2・3・4であり、全て7世紀代の住居跡と考えられる。H-2はW-1が中央部を横断している為、大部分の壁・竈・遺物が消失している。遺物は少ないが覆土より出土した須恵器蓋から当住居跡は7世紀後半と位置づけた。H-3は調査区南東隅に位置し、住居跡南側約1/3が調査区外となる。本住居跡は他住居跡と比べ出土遺物が多く坏(1)・甕(2・3)・こも編み石(4~7)が出土した。坏は須恵器坏蓋を模倣したと考えられる所謂「模倣坏」の系譜を引くものである。口縁部との境に縦をもち、口縁部は緩やかに外反する。底部は範削りを施した丸底状を呈している。甕はやや小ぶりで、胴部が直立(2)、やや膨らむ(3)の若干の差異がみられるが概ね長胴甕の範疇にある。坏・甕から7世紀後半と位置づけた。H-4は遺跡周辺ではあまり見られない西壁に竈を配する住居跡である。遺物が皆無に等しく時期判別が困難ではあるが窓内の遺物や調査段階での状況から7世紀代に帰属すると考えられる。

### 平安時代

平安時代の住居跡は元経社地区では数多く確認されており、広範囲にわたって分布している。本遺跡で確認されたH-5・6は10世紀後半~11世紀前半の住居跡であり平安時代後期にあたる。H-5ではかわらけ状の坏(1~3)、高台塊(4・5)、雁又鐵(6)が出土している。かわらけ状の坏は口径約10cm、高さ約3cmとはほぼ同一規格であり、(1)に関しては窓内支脚上に被せた状態で出土している。H-6では灰釉陶器皿(1)、塊(2・3)、羽釜(4)が出土している。灰釉陶器皿は三日月高台の特徴(内面の内溝や外側の棱が弱い)、施釉方法(ツケガケ)、口端部の形状から大原2号窯式(10世紀第1四半期)と考えられる。高台塊は内面に黒色処理・ミガキを施し、器肉がやや薄手で精巧さを感じる。羽釜は鶴・調整をみるとやや粗雑な印象を受ける。灰釉陶器の使用期間が長期であると考え、高台塊・羽釜から当住居跡を11世紀前半に位置づけた。

### 中世

本遺跡で確認された概期の遺構はW-1・2、DB-1・2、1号火葬跡、A-1である。W-1は調査区中央やや南側で東西に伸び、断面逆台形を呈し覆土状況・遺物から中世のものと考えられる。本遺跡南東側に隣接する宅地の周間に土塁が巡っている。苔海域のものと考えられているこの土塁は調査区外の東南部で直角に曲がっており、それぞれ南と東へと伸びている。W-1は土塁の東西方向と平行するように走行するため、あたかも堀(W-1)と土塁がセット関係のように思えてしまう。しかし土塁に関しては現況の表面観察のみで土塁の構造・W-1との関連がわかつておらず、苔海域の塁に関してはある程度位置が解明されている城中央部と比べ、城域の北側にあたる本遺跡周辺では塁の位置は明確にされていない。塁(W-1)と土塁の構造・関係・苔海域との関連については次年度以降の調査に期待し、今回調査結果ではW-1は中世の塁跡と評価したい。W-2は調査区東壁際に南北に走行する。今回の調査では塁の肩部のみの確認であり大部分は調査区外となる。南北に伸びるこの塁は前述の土塁・W-1と延長線上で交差する。交差部分は調査区外であるため性格・重複関係はわからない。



D B - 1・2は隅丸長方形の土壙墓であり共通点が多い。頭・顔の位置に違いが見られるが共に横臥屈葬である。土壙墓の長軸はW - 1の走行方向にはほぼ合致する。このことはW - 1埋没後に土壙墓が掘られたと考えられるが、遺構確認の段階ではW - 1上に土壙墓の掘り込みプランは確認されていない。そのためW - 1埋没途中の段階に掘り込まれたと推測される。人骨については宮崎重雄氏の鑑定によれば被葬者は共に壯年期(20~39才位)の女性であるという。

1号火葬跡はW - 1堀底確認の段階で炭化物を含んだT字状のプランとして確認された。群馬県内の中世火葬遺構については橋崎修一郎氏の研究があり、群馬県埋蔵文化財調査事業団が報告した事例を集め分類している(橋崎 2007)。本遺跡で確認された遺構を橋崎氏の分類に照らし合わせると、火葬人骨・炭化物・焼土を伴う「火葬跡」で長方形土坑の長辺に振出しを有し下T字状を呈する「タイプII」に形態分類される。この集成によれば火葬跡:95.9%、タイプII:32.3%と検出された割合が高く、前橋・高崎を中心とした平野部に広く分布している。また捨(取)骨方法でも鈴田豊之氏の研究を基にほぼ全ての焼骨を捨(取)骨する「東日本タイプ」と、主要な部位のみを捨(取)骨し他は残置する「西日本タイプ」に分類している(鈴田 1990)。本遺跡の火葬跡はその大部分をW - 1により削平されており僅かに残存する火葬人骨・炭化物は少量である。これだけで判断するのは困難ではあるが注意深く観察すると残存する焼骨は小型のものが多く占め、大型の部位は見当たらない。推測の域を出ないが「東日本タイプ」の範疇としたい。

調査区を南北方向に横断するように確認された道路状遺構であるA - 1はH - 6の埋没後(7世紀代)からW - 1が掘られる(中世)までの間に築造・廃絶された遺構である。路面が地山硬化面、黒褐色土硬面と硬化面上に敷設された砂礫敷きの3面あることからある程度長い期間に亘って使用されたことが窺える。周辺遺跡でも道路状遺構は確認されているが遺構前面が浅いため上層からの削平等により断片的に分布している。そういう状況からルートとしては明確化されていない。

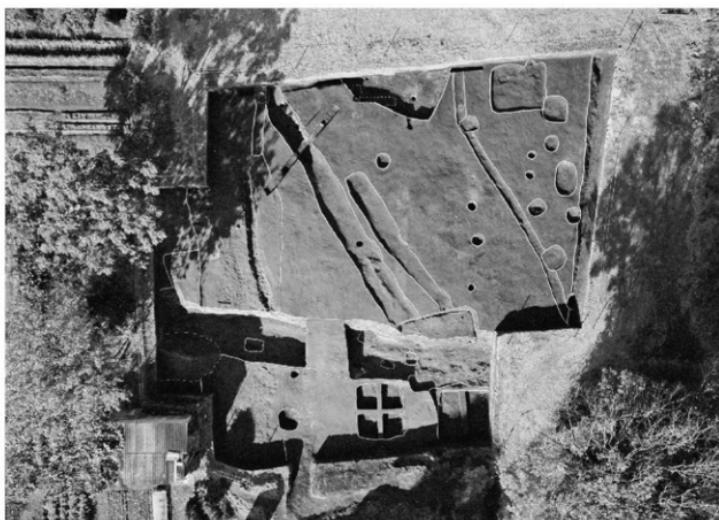
今回の調査で確認された蒼海城の堀と推定されるW - 1と道路状遺構であるA - 1は明確な報告ができず今後の調査課題としたい。蒼海城に関しては近年元総社地域での発掘調査の増加に伴い堀・郭等の範囲が解明されつつあり、今後W - 1の評価も変わる可能性も考えられる。道路状遺構のルートの解明は当時の人々の生活を知る上で重要な意味を成す。特に元総社地区は上野国府・蒼海城が存在する特異の地域でありその重要性は増す。部分的に確認されたA - 1も今後の周辺城での調査によって解明されるであろう。今後の調査・研究によって古代から上野国を中心とする元総社地域の歴史が解明されることを願いたい。

#### 参考・引用文献

- 山崎 一 1978 『群馬県古墳群の研究』上巻 群馬県文化事業振興会  
山崎 一 1979 『日本城郭大系』第4巻 茨城・栃木・群馬 新人物往来社  
坂口 一・三浦京子 1986 『奈良・平安時代の土器編年』『群馬文化』208 群馬県地域文化研究協議会  
桜岡正信 1991 「7世紀以降の土器器群の変遷とその要因について」『群馬考古学手帳』Vol.2 群馬土器観会  
鈴田豊之 1990 『火葬の文化』新潮社  
中世土器研究会 1995 『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社  
橋崎修一郎・石守 晃 2003 『群馬県出土人骨データベース』『研究紀要』23 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団  
能登 建・小島政子 2006 『関東地方の初期S字型出土土器の立地について』『研究紀要』24 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団  
橋崎修一郎 2007 『群馬県出土中世火葬遺構』『研究紀要』25 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団  
出土鉄貨研究会 2009 『中世の墓と鉄』第16回出土鉄貨研究会資料  
高崎市教育委員会 2009 『下佐野長者屋敷道路』



PL. 1



調査区全景（上が北）



調査区全景（上が東）



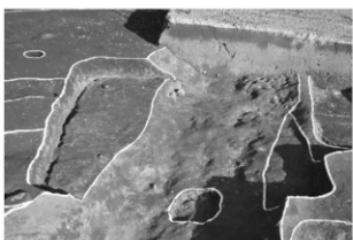
PL. 2



H-1号住居跡全景（南東から）



H-1号住居跡遺物出土状況（南東から）



H-2号住居跡全景（西から）



H-3号住居跡全景（西から）



H-3号住居跡遺物（西から）



H-3号住居跡遺物出土状況（北から）



H-3号住居跡遺物出土状況（南から）



H-4号住居跡全景（東から）



PL. 3



H-4号住居跡全景（東から）



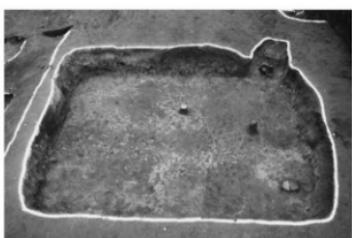
H-5号住居跡全景（南から）



H-5号住居跡全景（南から）



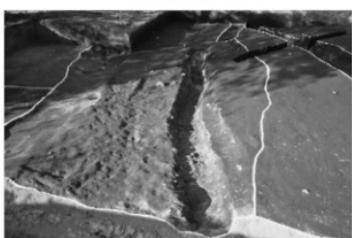
H-5号住居跡遺物出土状況（南から）



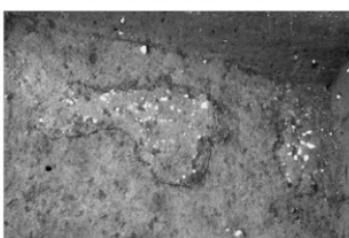
H-6号住居跡全景（西から）



H-6号住居跡全景（西から）



A-1号道路状道構東側側溝全景（南から）



A-1号道路状道構紗綿敷設状況（東から）



PL. 4



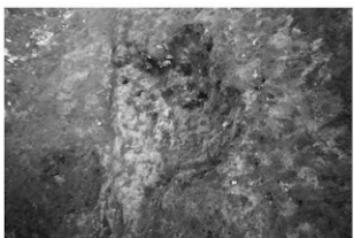
W-1号溝全景（西から）



W-2・5号溝全景（南から）



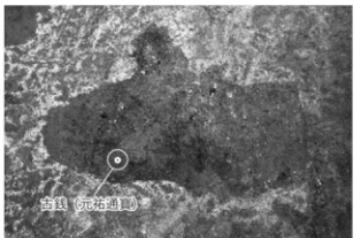
W-3・4号溝全景（南から）



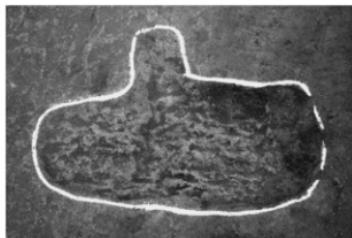
DB-1号土塚墓全景（西から）



DB-2号土塚墓全景（東から）



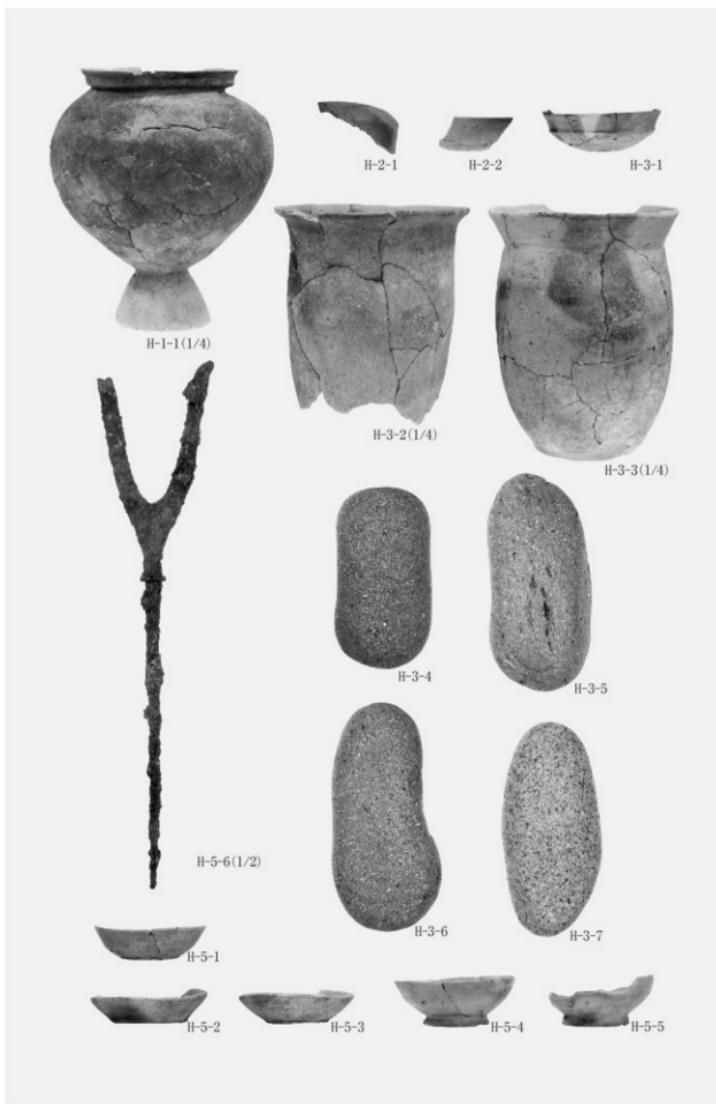
1号火葬跡確認状況（西から）



1号火葬跡全景（西から）



PL. 5





PL. 6





## 発掘調査抄録

フリガナ	モツウヤオウミイセキダン
書名	元総社蒼海道路群(30)
副書名	前橋市都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
編著者名	神宮 駿・佐野 良平
編集機関	技術測量設計株式会社
発行機関	前橋市埋蔵文化財発掘調査団
発行機関所在地	前橋市三俣町二丁目10-2
発行年月日	西暦2010年3月12日

所収遺跡名	所 在 地	市町村	遺跡番号	位 置		調査期間	調査面積	調査原因
				北緯	東經			
モツウヤオウミイセキダン 元総社蒼海道路群(30)	前橋市総社町總社 3095-8ほか	10201	21A130-30	36° 23' 24"	139° 2' 13"	2009.11.2 ~ 2009.12.04	570m <sup>2</sup>	前橋都古計画事 業元総社蒼海土 地区画整理事業

所収遺跡名	種 别	主な時代	主 な 遺 構	主な遺物	特記事項
元総社蒼海道路群(30)	集落跡 その他	古墳～平安時代 中世	堅穴住居跡 6軒  道路跡 1条 堀・溝 6条 墓坑 2基 火葬跡 1基  井戸・土坑・ピット 23基	雁又鐵 灰釉陶器 須恵器 土師器  かわらけ 五輪塔 古銭	古墳時代～平安時代の 集落道路。 中世期の道路状遺構と 蒼海城の堀と推定される 墓跡。 中世期の土壙墓・火葬 跡。

## 元総社蒼海遺跡群(30)

2010年3月5日 印刷  
2010年3月12日 発行

発行

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

前橋市三俣町2丁目10-2

TEL 027-231-0531

技術測量設計株式会社

朝日印刷工業株式会社

編集  
印刷









